前の作品へ次の作品へ K.M. 星のように真暗なトンネルの中でひとりだた。どこまで続くんだ…… ふと顔を上げると、彼方にひとつの小さな光がみえた。私はほと息をついた。その光は針の穴ほどだたが、道しるべの星のようにはきりと力強く光ていた。私は思わずその「星」に私を導いてくれるよう願い、祈りを捧げた。 　　星が銀河に浮かぶように 　　私も大いなる流れに身をゆだねた。 　　星がいつも地平線から昇るように 　　私も一からスタトする、と決意した。 　　そして星が自ら光り輝くように 　　私も自らのいのちを燃やして生き抜く、と誓た。おもむろによろめきながら立ち上がた私は、光射す出口へ向かて、一歩を踏み出した。